

A－２．児童の実態

(1)アンケートの結果より

４月当初、算数に対する意識・学び合いに対する意識についてアンケートをとってみた。

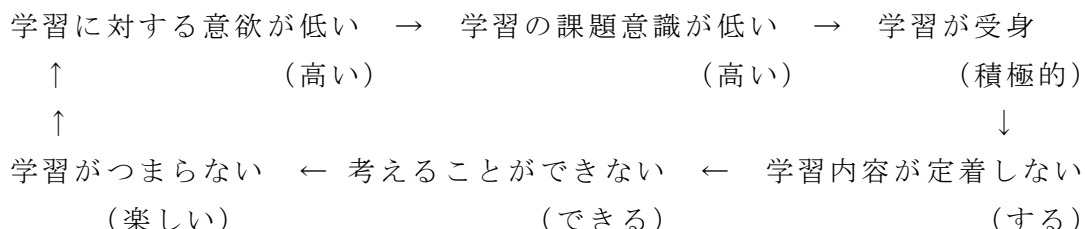
＝ 対象 ５年生 ＝

	とても	だいたい	あまり	ぜんぜん
①算数は楽しい	10.3%	46.2%	30.8%	10.3%
②算数は簡単	28.2%	48.7%	23.1%	0%
③学習内容がわかる	25.6%	48.7%	23.2%	2.5%
④友達の話が聴ける	15.4%	43.6%	38.5%	2.5%
⑤自分の考えを聴いてもらう	17.9%	35.9%	41.1%	5.1%
⑥ノートに分かったことを書く	12.8%	38.5%	43.6%	5.1%
⑦考える力がある	10.3%	41.0%	43.6%	5.1%

算数は「簡単」で「わかる」と感じている児童の数に比べると、算数を楽しいと感じていない児童が多い。また、「簡単」で「わかる」と感じているのに、自分の考えを聴いてもらったり、考えをノートにまとめたり、考える力はさほどないと感じている児童が多い。このことから、教えてもらったことは分かるし、簡単だと思っているが、課題意識をもって積極的に学んでいるとはいえず、楽しさまでは感じていないようである。

(2)学力テストの結果より

４年生の時にを行った学力テストの結果を分析してみた。学年全体の通過率は、県全体の通過率より、6.0 ポイント以上下回っている。４領域の通過率を見てみると、表現・処理はほぼ県全体の平均に近いことから、あまり思考を要さない、パターン化された練習の繰り返しはできていると考えられる。県全体の平均を 5.0 ポイント以上下回っているのは、知識・理解がほとんどである。もちろん知識・理解が定着していないのだから、数学的な考え方のポイントも低くなっている。(1)でのべたアンケート結果も加味すると、



このような悪循環を繰り返している可能性がある。どこかをきっかけに、よい循環に変えることができれば、算数の楽しさを感じ、基礎・基本も定着していける可能性がある。

(3)学びの構え

4月当初の子ども達の学びの構えは次のようであった。

学習態度はまじめである。課題に対しては自分なりに一生懸命に取り組もうとする。しかし、学習に対しては受け身な児童が多い。わからないことを自らクラスメートに問いかける児童は少なく、発言は「正しい答をいわなければならない」、発言して「間違っていたらどうしよう」、「〇〇さんの言うことは多分正しい」という意識が強いように感じられる。

発言力があり、算数の得意そうな児童が挙手し、自信のない児童はだまって様子を見ている。ある考えに、賛成か反対かを全員にたずねても、どちらにも挙手しない児童がいる。それも、わからないという様子ではなく、間違えた方に手を上げるのが嫌・いけないことという感じである。自分の考えていた方が正しいとわかったり有力発言があると、安心したように挙手できる。計算練習となると黙々と取り組める。一度方法をマスターすると、かなり正確に速く計算することができる。

全体として、学習には受け身的で、正しい答をいうことがよいことと思い込んでおり、パターン化されたことについては安心して取り組める児童が多いように感じられる。

(4)課題

学力テストの結果や、日々の学習での児童の様子から、「考える力」が弱いと考えられる。

算数において「考える」とは、現在の情報としてわかっている数と数・既習と既習を関連づけて、課題を解決したり、新たな事実にとどろついたりすることであると考えている。その観点からみると、児童は考えようとする意欲はないわけではないが、考える基礎となる「既習が定着していない」ことと、既習や現在の情報としてわかっていることを、「どのように関連づければよいかわからない」ために考えることができないのではないだろうか。

さらに、「なかなか既習が定着しない」のは、学習が受身であることも考えられる。

子ども達が「はっきりさせたい!」と思った課題を自分達で学び合ってはっきりさせていったことは、本当の「わかった!」になる。そして、その過程で考えを積み重ねていたり、対立したりして真剣に学習に取り組んだ経験は、楽しさにもつながっていく。自分の未熟な考えや間違った考えが、学習の高まりに役立ったと感じれば、子ども達は自分の存在感を感じ、楽しくなる。

児童に基礎・基本の定着をはかり、算数の楽しさを味わわせるためには、学び合うすばらしさ・大切さも感じさせることが必要である。